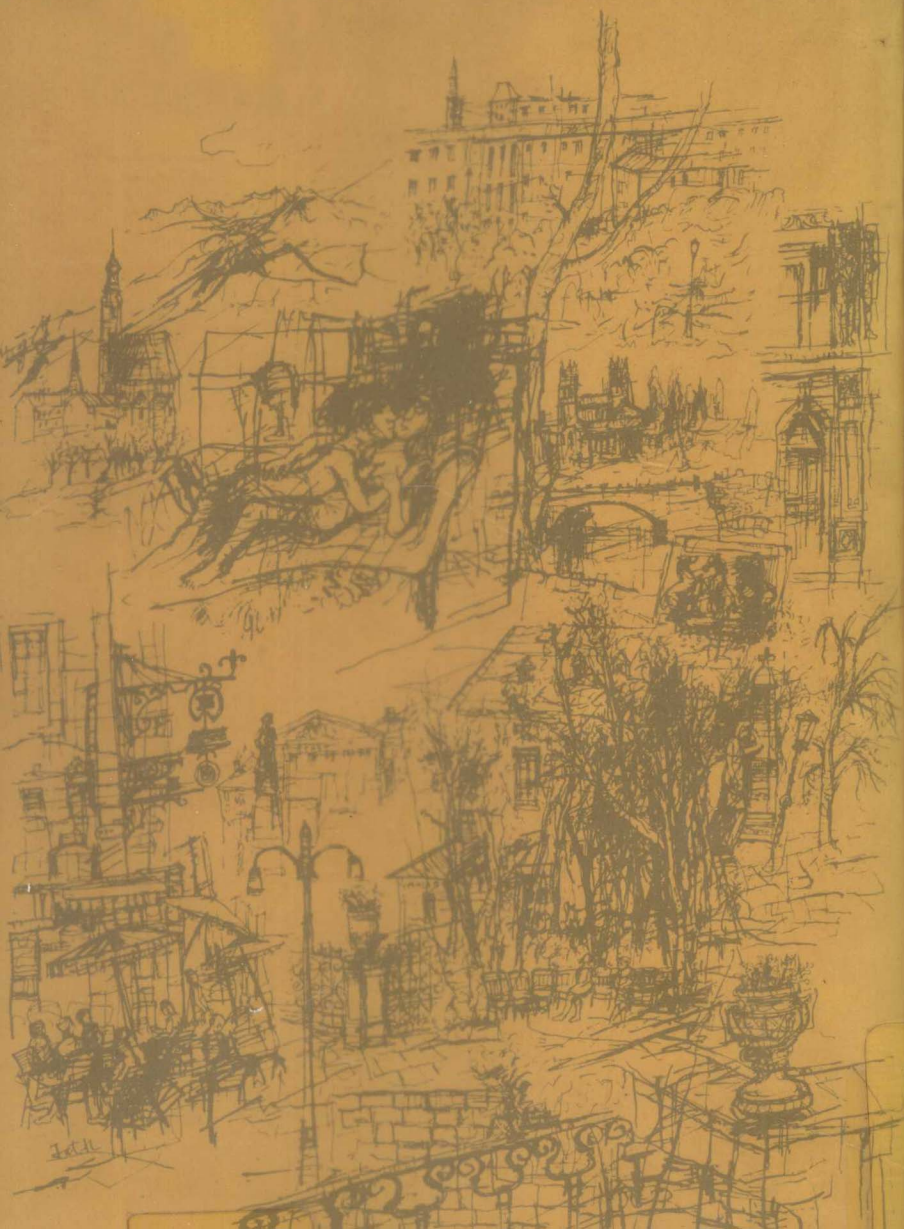


夏の闇 • 開高 健





夏の闇・開高 健・新潮社

夏の闇 (なつのやみ)

●著者 開高 健 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 株式会社 金羊社 ●製本 新宿加藤製本所 ●発行所 株式会社新潮社
郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71番地
電話東京 (03) 260-1111 振替東京808 番
昭和47年3月15日発行 昭和47年5月25日4刷

定価 550円

©Ken Kaiko Printed in Japan, 1972

乱丁、落丁本はお取替えいたします

夏
の
闇

……われなんじの行為おこないを知る、
なんじは冷ひやかにもあらず熱あつきに
もあらず、われはむしろなんじ
が冷ひやかならんか、熱あつからんかを
願ねがう。

『黙示録』

その頃も旅をしていた。

ある国をでて、べつの国に入り、その首府の学生町の安い旅館で寝たり起きたりして私はその日その日をすごしていた。季節はちょうど夏の入口で、大半の住民がすでに休暇のために南へいき、都は広大な墓地か空谷にそっくりのからっぽさだった。毎日、朝から雨が降り、古綿のような空がひくくたれさがり、熱や輝きはどこにもない。夏はひどい下痢を起し、どこもかしこもただ冷たくて、じとじとし、薄暗かった。膿んだり、分泌したり、醗酵したりするのは何もなかった。それが私には好ましかった。

旅館のすぐまえに川が流れ、木立にかこまれた寺院が対岸にある。いつ見ても川は灰黄色にどんよりにごり、数知れない小穴をうがたれ、寺院の屋根の怪獣は濡れしょびれている。咆哮（ほうこう）しようとして口をあけた瞬間に凝視を浴びせられた姿勢で怪獣は凍りついている。私はベッドに腰をおろしてウォッカをすすりつつ黄いろい川に輪がひろがっては消え、消えてはあらわれるのを眺めた。じっと見つめているとやがて無数の菌糸が消えて、たった一滴の雨が降ってい

るように見えてくる。それにあきると毛布にくるまって眠りこける。さめるとパンやハムを買いに外出し、本屋にも映画館にも料理店にもよらないで帰り、ベッドのなかで食事をしてまた眠った。窓のカーテンはしめたままなので、赤い闇がたちこめるほかは、朝とも夜ともけじめがつかない。私は形を失い、脳がとけかかっているらしく、いくら眠ってもつぎまた眠れた。

部屋は学生下宿である。古い壁紙はどこどころ破れたままで、ナンキン虫をつぶしたらしい褐色の血痕が幾条もついている。洗面所の鏡はY字型に大きくひび割れ、浴槽があるにはあるが、湯はでたりでなかったりする。ベッド一つとテーブル一つで部屋はいっぱいで、体をよこにしなければすきまを通ることができない。麻袋のような赤いカーテンが窓にさがっている。その赤のおかげで、古ぼけたチューリップ型の豆スタンドに灯をつけると、部屋いっぱい血をみたしたようになり、荒涼が消えて、あたたく柔らかな優しさがあらわれる。壁や天井に、崖とか、森とか、洞窟とか、空などの影ができる。トウモロコシ葉からつくった紙で巻いた、いがらっぽい塩漬の黒葉のタバコをふかしながらそれらを眺めていると、さめたばかりなのにまたうとうとしてくる。人もこず、電話も鳴らず、本もなく、議論もない。私は赤い繭のなかで眠りつづける。蒼白い、ぶわぶわした脂肪が頬や腹でふくらみ、厚くなり、眼がさめて体を起すと、まるで面をかぶったようである。どんよりした肉のなかにこもってさまざまなこの十年間の記憶を反芻してみるが、いとわしいけだるさに蔽われて、苛烈も、歓喜も、手や足を失い、薄明のなかの遠い光景でしかない。それらは温室の蔓草のようにのびるままのび、鉢からあふれて床へ落ち、自身で茎や枝を持ちあげる力もないのにはびこりつづける。私からたちのぼったものは壁を這い、天井をまさぐり、部屋いっぱいになり、内乱状態のように繁茂する。

ちぎれちぎれの内白や言葉や観念がちぎれちぎれのままからみあい、もつれあい、葉をひらき、蔓をのばして繁茂する。

パンを買いにでたとき、雨が小止みになったりすると、私は大通りのゆるやかな坂をのぼって、公園へいつてみる。そこで一人の初老に近い男が仕事をしているのをちょっとはなれたベンチに腰をおろして眺めるのがひそかな愉しみである。ここへくると彼が健在かどうかをたしかめずにはいられない。去年もそうしたし、三年前もそうした。ここ数年間、ずっと彼はおなじ仕事をつづけてきたらしく思えるが、はじめて見かけたときにくらべると、腹が丸くなつてせりだし、眼のしたに袋ができ、背がたわんでいる。けれど生きた蛙を呑んだり吐いたりする動作はずっと洗練されたように見える。彼は木かげであらかじめ水を飲んでおいてから通行人がくるのを見ると道へでていき、口をいっぱいにひらき、大きな、厚い、黄緑がかつた舌のこびりついた舌をいきなりだらりとだしてみせる。そこへ蛙をのせ、一気にごくりと呑みこむ。眼をしばたたく。ついで右手をあげ、手刀にして、ふいに太鼓腹をはげしくうつ。口からドツと水がとびだしてあたりに散る。同時に蛙もとびだし、胃液にまみれて砂利のうえをとびまわる。男はそれをひろって金魚鉢に入れてから見物人にむかつて手をさしだす。見物人はポケットをさぐって一枚か二枚の硬貨を男の手にのせ、ぼんやりしたまなざしで散っていく。ずっと男はだまっていたきりである。ひとことも口をきかないのだ。クスリともしないのだ。そうやって一日に何度か蛙と水を呑んだり吐いたりだけで暮しているらしい。いつか私は彼が酒場で金魚鉢をよこにおいて酒を飲みつつ主人と談笑しているのを見かけたことがあるから啞ではない。この男は戦争中も右往左往の群集に向つて蛙を呑んだり吐いたりしてみせていたのではあるま

いか。死ぬまでつづけるつもりなのではあるまいか。私はそう思うことにしている。その徹底的な侮蔑を眺めていると小気味いい。何となくホッとせずにはいられないのである。まだこんな方法がのこっていたかと思う。食品店でパンとハムを買って部屋にもどると、さきほど着たばかりのシャツと靴をぬいで私はベッドにたおれる。毛布には体の形の鋳型ができていて、しっかりとくわえこまれてしまう。枕に頬が沈むともうそこに睡気が煙のようのにのぼりかかっている。きれぎれのもの、柔軟なもの、形のないものがふたたび葉をだし蔓をのぼし、部屋いっぱいに繁茂しはじめる。

ある朝早く、私はジャンパーを着て停車場へいった。うつろで冷たく薄暗い町角のあちらこちらに夜が去りがてに這っていた。駅の暗い構内には緑いろの大きな影がそびえ、食堂にはピンクのネオンが輝いているが壁は荒寥こうりょうとしていて、夜と朝がひっそりとせめぎあっている。男や女の顔はコーヒー碗わんのふちで皺しわに閉じこめられるか、靄もやになるかしている。食堂の入口近くに何人ものヒッチハイカーがリュックや水夫袋を枕にして眠りこけているが、長髪や首すじから足の指の垢かたのようなねっとりとした匂いがたちのぼり、顎を胸に落したまま水にとけそうな眼をぼんやり瞠もはっているところを見ると、陰毛ひげのなかへすっかり後退して、敵を見ないうちに敗北してしまった兵のようである。私は席をとると熱くしたラムをたのんだ。熱いラムの滴が香りをたてながらくたびれて軟らかくなった腸の皺に沁みていくと、一滴一滴花がひらくようだった。よほど疲労のしたで期待がゆっくりうごきはじめた。それは急速にラムとまじって湯気をたてつつひろがり、背をもたげ、顔を見せないで私を蔽いはじめた。女は寝台車でくるのだが、よく眠れただろうか……

十年になる。

かれこれ、十年になる。朦朧^{もうろう}としている。とらえようがない。私は人ごみのなかにいるのに繁茂しかかっている。一昨日、となりの国の小さな首府の郊外から女が電報をうつてくるまでは回想がしっかりしていた。毛布のなかで声や、まなざしや、光景を並べ、何時間も私はそれらをおきかえたり、組みかえたり、ひとつだけはなして凝視したりしてすごした。ほかに何人もの女の顔が明滅するなかで、一つの顔が薄明のなかで最前面にあらわれた。それは白い咽喉をそらせて笑ったり、薄いくちびるを噛みしめて眼を伏せたり、額の髪をはらったりした。けれどいま、ラムの甘い匂いとタバコのいがらっぽい霧のなかでは、別れた日の遠景が小さく見えるだけである。東京の郊外の駅の夜八時頃である。その日までに何度か女は食事や情事のあとで日本を捨てた決心をうちあげたのだが、暗示のようにほのめかすだけだった。決意としては語らなかつたし、計画の細部も語らなかつた。話そうにも話しようがなくて途方に暮れていたらしいのだと、あとになって外国から手紙がきて察しられた。それまでのあらゆる場合とおなじように私は何もいわなかつた。だまって耳をかたむけてよこたわっているきりであつた。女が語ろうとしないことや語りたがらないでいることに私は立入ったことがない。いまでもそれは変らない。責任のわずらわしさに耐えられない自身の脆弱^{ぜいじやく}さが不安なためなのだが、あまりに自身に執しすぎる心をとくに憎み、厭いながら、顔をそこからもたげることができないのである。この無気力が冷酷を分泌するのではあるまいか。汗にまみれて全身発光しながらのしかかってくる広くて白い胸とあらそいながら私は女の肩ごしに障子窓のむこうにある檜葉垣を眺め、遠くの人声を聞いていた。女が絶望から力をぬきだしてその無限界さにおびえきつ

ているのだと私はさとることがまったくできなかった。ただ牡の誇りで呼応することにふけり、自身を確認することに腐心していたようだ。なだれ落ちる髪の毛で女がぎれぎれに叫び、夜半の子供のように口のなかで転生しきらない言葉をもてあましてささやく声を私は完全に誤解していた。そうと知ったのは女が声を実践してほとんど無一文のままで日本を去ったとわかってからであった。手紙を手にして私はしたたかに自身の愚昧を知らされた。しかし、どこかにもう身辺に苦しむ女の眼や、声や、体重を感じなくてすまされそうになった事態を歓迎する心もううごいていたようだ。女の果敢さにうたれたのは荷が軽くなった心のたわむれではあるまいか。負担が消えてのびやかになったはずなのにその後、何度も、一人で、女といっしょに訪れて冗談や議論にふけた場所を訪れ、眼で席を求めずにはいられないということを私はしているのだが、あのさびしさはやましさのかげろうではなかっただろうか。手のなかにあるうちは玩具なのに失われたとわかるとにわかになんかそれを宝石と感じて心身を焦がす。あの子供の心にはしばらくとらわれた。舌がうつろな心に心は感傷にある食事を一人で何度もかさねた。そしてかつて二人でいったときにでてきた給仕がいるあいだは彼の視線や挨拶をわずらわしいと思いつつもかよったのに、その給仕がいなくなると私はその店から遠ざかった。

その後、女はいくつもの国を渡り歩き、国を変えるたびに手紙をよこした。それによって私は女が日本商社のタイピストをしていることや、キャバレーのタバコ売り娘をしていることや、やがて奨学金をもらえるようになって学生にもどったこと、イギリス人の若い原子科学者に結婚を申込みたこと、ドイツ系アメリカ人の言語学者と恋をしていることなどを知らされた。文面からするかぎり女はいつも不屈で、勤勉、精悍、好奇心にあふれるまま前進し、国から国

へ移動し、生を食ふことにふけていた。日本にいて専攻科目の学者になろうとしても學閥に出口を制せられていることや、翻訳者になろうとしても出版社が閱學者に制せられてフリー・ハンドを持たないでいること、考えぬいたあげくルポ・ライターになろうとして新聞社のグラフ雑誌ではたらいでみたがうまくのびられなかったこと、日本にいたるとき私と顔をあわすたびに痛嘆し、罵倒したそれらのことについて女はもうひとことも手紙でふれようとせず、自身をうけ入れてくれる機関をようやく発見したことにもっぱら熱中し、おどけたり、雀躍したりしているように読まれた。私は手紙をすべてうけとり、一字々に重錘おももりをおろすようにして読んでいった。しかし私は私でとらえようのない渴望のままこの十年間に十三回、外国へでかけ、旅から旅へ自身を追いたてて歩くことに熱中していたのだった。女からの手紙のうち何通かは外国のホテルでうけとったが、読んだあとはかねてからの約束にしたがって、こまごまに裂いて川へ投げた。激情にひしがれて茫然となっているか、そうでなければ懈怠でとけきっているかということがしばしばだったので、女が読まれたかと思っっているように読むことはおそらく私にはできないことだった。それでいて私は女に手紙を送り、原子科学者や言語学者との恋に水をさす結果となる文章を書いたと思う。何の効果も期待できないのにそういう文章を書いたのは、はっきりわかっているが、その場にゆらめいた嫉妬からであった。何にもできず、何の資格もないのに私は女をとどめられるものならとどめておきたかったのだ。きみは自由を知りすぎたから誰との家庭生活にも安住できないはずだ、というのが私の手紙の主旨であった。孤独に耐えられないために結婚を選ぶのなら、フランス人のいう、オムレッツをつくるためには卵を割らねばならない、という諺ことわざにあうが、それならば、オムレッツをつくったあとでそれが不出

来なためにいわれもなく卵をのしってさびしくなるということも同時にあるのではないだらうか。何回もやってみなければわからないことらしいが。女の手紙が軽快でいきいきとしていたので私はそういう返事を書いたと思う。いま私が知っているのは、女がABCも知らないでたどりついた国に六年すごして、その首都の大学の東方研究室で客員待遇をうけていて、秋に提出する博士論文のためにいそがしい、ということだけである。そして、タバコの霧のかなたに見える小さな遠景である。夜の郊外の駅の改札口に女が真紅のレインコートを着て佇み、駅員が寡黙な横顔を見せている。女が大学を卒業して二、三年にしかない鋭い顔で毅然としながらおびえたまなざしで私を眺めていなかったこと、私の頭よりちょっとうしろを眺めるまなざしでいたこと、髪の毛のうしろに小さなタバコ屋の蛍光灯があったことが、私に見える。女の顔の高い頬骨のあたりにある表情があったが、それが情事のあとの優しい疲れであるよりは諦観のあげくのやわらぎだったのだと、いまになって知るのだが、遠景にはけだるいが鋭いまなざしと、かつては水泳選手だったこともある白いたくましい足にピアノ線のような筋が強く走って消えている。

きた。時刻である。私はグロッグの受皿に小銭をおき、自動販売機で入場券を買い、プラットフォームへでていく。遠い北の港町で構成されて二つの国を通過してきた、頑強な緑いろの古鉄の箱が線路のぬかるみを注意深く選んで、円天井の影のしたに入ってくる。無数の蒼白くむくんだ顔やおぼろな眼が寝台車の窓を埋めてこちらを見おろしている。一輛々々点検していくと、円天井から雨のなかにでてしまった。暗い空から雨はびしゃびしゃ容赦なく落ちかかってきた。プラットフォームもずっとはずれのほうで真紅のレインコートを着た女がスーツケー

スをひきずりおろそうとしているのを発見した。それをめがけて小走りにかけだしたはずみに雨が音をたててしぶきはじめ、陸橋も、車輛も、線路も、すべてが水のなかに消えた。

「……」

「……！」

女がふりかえって何か声をあげた。蒼白くて高い頬に髪が濡れてこびりついているが、眼がいきいきと輝き、くちびるがひらいていた。女が背を起すと微笑が顔いっぱいひろがった。

「電報、とどいた？」

「とどいたよ」

「来てくれたのね」

「もちろんだ」

両足をひらいてしっかりと踏みしめ、女は肩をうしろにひいて私を見あげた。成熟しきって、肩も、腰も、すでに中央山塊のようにたくましく深くなった女が、まつ毛を雨にうたれるまま、

「会えたわ、とうとう」

激しかかるのをおさえて、

「会えたわよ」

といった。

「何年ぶるかしら」

「十年だね」

「そうね」

「かれこれ十年だよ」

「そうね」

「たくさんの水が流れたのさ」

ふいに女が高い声で笑い、

「橋の下をね」

といった。

緑いろの暗い構内をぬけると駅前広場にでるが、そのふちに一軒の店がひらいていたので入ることにした。駅ではもうとつくに夜が明けていたが、この店ではまだはかなく最後衛がテーブルに伏せた椅子の林のなかをさまよっているようだった。皺ばんだ白服を着た中年のバーテンドーがむつりした顔つきでコップや茶碗を洗っている。がらんとした店のすみっこで黒人青年がパチンコ遊びをしていて、長い骨ばった指やひきしまった腰でパチンコ台をゆさぶりたてる音がときどき鋭くこだまする。それが車庫で重い道具を投げだすようにひびく。

女はミルク入りコーヒート三日月パンを注文した。私はパステイスを注文した。乳黄色の液のなかで氷が鳴り、茴香の新鮮な香りが鼻さきをしっとり濡らしてくれた。コーヒート三日月パンを女がべつべつに食べようとするので、少しずつちぎってコーヒートに浸して食べてもいいのだと教えた。女はおとなしくそのとおりにし、寝台車でよく眠れないので車掌に不平をいいつづけたこと、眠れないまま博士論文の修正にふけて徹夜したことなど、とりとめもなく話した。訴える相手をやっと思つたのではじけるようにはしゃいでいる気配もあったが、徹夜の憔悴しやうさいでうなだれそうになっている気配もあった。

コーヒーを飲みほしたあとで女は碗を受皿に伏せた。しばらくしてからそれをたて、碗の底にのこった渣（くず）をしげしげと眺める。

「占ってあげる。私はなかなかうまいのよ。研究室の連中によくほめられるの。ジブシー直伝とはいかないけれど、評判がいいんだから。これはですね、蛇だナ。三匹の蛇ですね。三匹の蛇が集って眼鏡をかけてるんだわ。眼鏡をかけた三匹の蛇がいるのよ。いったい何のことかしら」
「何だろうね」

「待って。占ってあげるから」

ふいに雨が音をたてて降りはじめた。ハンバーガーやサンドイッチの値段を白ペンキで書きなぐった大きな窓のそばにすわっていたのだが、雨はどしゃ降りひたむきに窓をたたき、舗道で白く跳ね、たちまち広場にいくつもの小流れができた。駅も広場もすべてがとけてしまった。東西南北から迫ってくるはげしい雨音のなかでこは孤島のようにひっそりとのこされた。
「よく降るわね。夏だというのに。私のところも毎日こうだわ。いまはどこへいってもおなじなの。いやになるわね。朝目がさめたときに十も老けたみたい」

「去年もおなじだったね。毎日降ったよ。洪水期の前兆じゃないかと書いてる新聞もあった。新米河期がぼつぼつ来かかってるんじゃないかというんだ。真剣な口調なんで、笑うわけにもいかなかったけど」

「私がそうかもしれない。すっかり老けちゃって。いい年をして学生の仲間入りして追いつき追いこせでやってきたけど、どうかしたはずみにガックリすることがあるの。外国でつんのめるのは、人格剥離が起るのは、つらいわ。一日も二日も寝こんじゃってただぼんやりしてるの

よ。その日その日の運勢を腕で見ることにしてるの。私の腕はいいのよ。朝目がさめると、こう、のぼして、表返しにしたり裏返しにしたりする。すると、白磁みたいに白いなかに血が青く沈んで、しっとり脂がのってるようだけど透明に澄んだ感じがするときがあるの。そういう日は元気がでるわ。何かいいことがありそうでね。コーヒー渣よりはたよになるわよ。この十年私は腕だけがたよりだったわ」

「昔もそういつてたよ」

「昔はほかにもあったの。肘とか。肩や足なんかもね。御自慢だったの。けどもうダメ。腕しかないわ。よくわかってるの。これで赤い帽子に青い制服を着たら救世軍よ。ときどき男の子で悪口をいうやつがいる。憎いったらないんだけど、ひっぱたいてやろうと思ってるうちにふとうなずいちゃったりして。だらしないったらないわ」

「おれはもっとひどいよ。腕すらないな。きみがうらやましいくらいだよ。ぶくぶくしちゃって、ものおぼえがわるくなって、首に筋ができたね。眼もあてられない。朝からごろごろ寝ばかりでね。とめどなく眠れるな。競争にでたいくらいだ。どうしてこう眠いのか」

「はげましていただくのはうれしいけど、あなた、変ってないわよ。うらやましいわ。自信持っていいわよ。手紙ではもっとひどいことを想像してたんだけど、ホッとしたわ。白髪もないようだし」

「マジックをぬってきたのさ」

「明るいところがつらいわ」

「……」